

動物園を越えて



野生動物がこれから生き残っていくために、私たちがなすべきことは、動物を動物園に集めることではなく、彼らの生態系を守ることです。生態系を守る活動をする団体や、動物を救助・介護しても、それを売ったり、繁殖させたり、見世物にしりしない保護施設を支援することによって、人々は野生動物の保護に大きく貢献することができます。動物園が動物にできることは、より少ない動物を収容することによって個体あたりのスペースを広く確保し、危険な状況からの救出など、

人の関与が必要な動物たちの為にサンクチュアリとしての役割を果たす場所へと変わっていくことです。



動物を監禁して飼育することの悲惨さをまわりの人に伝えていきましょう。2005年7月の世論調査では、98%の人が、クマ牧場のクマが苦しんでいると知っていたら、クマ牧場には行かないと答えています。

動物園をサポートしないでください。

PETAAsiaPacific.com

PETA

動物の倫理的扱いを求める人々の会
アジア・パシフィック
PETA Asia Pacific
Japan@PETAAsiaPacific.com



動物園： 監禁という虐待

動物園の動物たちは、生涯、自由を奪われてくらします。ジャングルや砂漠、森といった彼らが本来過ごしていた環境とはまったく違う、檻や囲いに監禁されます。食事や共に暮らす相手を自ら決めることは許されず、すべては人間によって管理され、コントロールされています。

アジア諸国の動物園に関する調査では、その環境の劣悪さと、驚くべき動物福祉の欠如が発覚しています。動物園の多くでは、動物に最低限必要である食事や水、衛生的に管理された環境さえも与えられていないのです。動物の多くは、草も生えないむき出しのコンクリートの中に囲い込まれ、不潔な床に放り投げられた腐った餌を食べ、悪臭漂う糞の生えた水槽の水を飲んで生きています。

PETAAsiaPacific

ストレスと狂気

身体的・精神的欲求不満により、動物の多くは、精神異常、ノイローゼの兆候を示し、自虐的行為をするようになります。1992年、ボーン・ワリー基金の設立者であるビル・トラハースは、檻に入れられた動物たちのとる、異常なまでの反復行動に対して“ズーコシス”(zoochosis)という新しい言葉を作りました。例えば、同じ場所をぐるぐる歩き回る、首や頭をずっと振り続ける、檻を舐めたり咬んだりする、などの行動です。

オックスフォード大学の研究者は、ズーコシスは、閉じ込められた動物のほとんどに見られると結論づけました。日本の31の動物園を対象とした調査では、総数116頭のキリンにおいて、例外なく、舌を無意味に出すなどの異常行動が見られたとしています。

檻に入れられた猫科の大型獣には、その中を歩き回るといふ行動がしばしば見られますが、これは、移動しながら狩りをするという野生の本能を満たすことができない為に起こるものです。オックスフォード大学の研究では、「広範囲の縄張りをもつ肉食動物を動物園で飼育するという行為を、根本的に改善、もしくは、無くしていかなければならない」と結論付けています。別の研究では、檻で飼育されているトラの頭蓋骨は、野生のトラと比べて明らかに奇形が見られることがわかり、それは過度なグルーミング(毛づくろい)一因われの動物の異常行動の一つが原因だとされています。

見世物にされているクワの檻には、クワが同じところを回りたりする事によってその部分が擦り減っていたり、同じところに尿をついた跡ができていたりします。日本各地のクワ牧場の調査では、クワは、一日のほとんどを寝て過ごすか、ぐるぐると同じ場所を歩き回っていた、という結果

が出ました。獣医師であるジョン・グリッパが、関東、中部地方にある動物園10箇所の調査を行った結果、絶え間なく頭を振り続けている2匹のツキノワクワが確認され、自らの体毛をかきむしり続けるサルも多数報告されています。



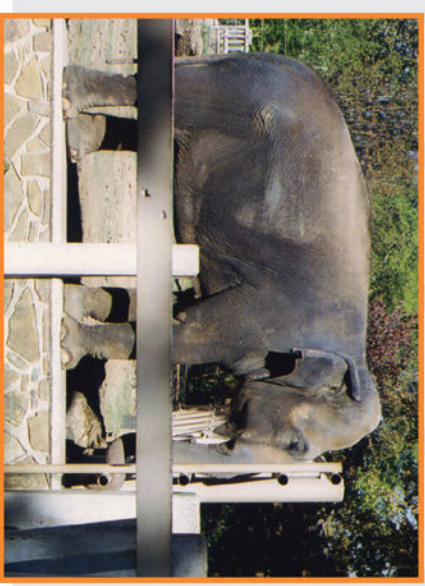
危険にさらされる厚皮動物

野生の象は、とても広い行動範囲をもっています。しかし動物園では、それは満たされず、コンクリートなどの堅い地面に立っている生活は、足に多大な負担をかけます。その結果引き起こされる関節炎は、動物園にいる象の主要な死因となっています。象の扱いは容易にするため、アルファックとよばれる、先端に鋭い金属のフックが付いた器具を用いる調教師もいます。それによって象に恐怖を覚えさせ、人間に反抗しないよう、象の精神にダメージを与えるのです。

タイでは、象は「フアジャン」(phajaan)と呼ばれる儀式に使われます。フアジャンという言葉を直訳すると、“押しつぶすこと”となり、若い象たちは、熱い鉄や金属製の鋭器で殴打され、観光客を背中に乗せたり、荷物を運んだりさせるために、いわゆる「調教」をされるのです。

動物の専門家の多くは、動物園での飼育は、象の複雑な習性に対応することはできないとしています。しかし、動物園に象を売って、金儲けを目論む人はあとを絶ちません。今日、アジア象は、一頭あたり120万円から150万円の価値があるとされており、所有者は、象を投資や取引にかけて、利潤追求にのめり込みます。その為に、貸し出しや取引をされた象たちは、劣悪な輸送環境の中、世界中の動物園に送り込まれるのです。

日本では、これまで約200頭の象が繁殖計画に使われましたが、絶望的なほど失敗に終わっています。唯一、兵庫県の子動物園で、2004年に赤ちゃん象が生まれましたが、母親が子育てを拒絶するという、野生では考えられない事態になりました。

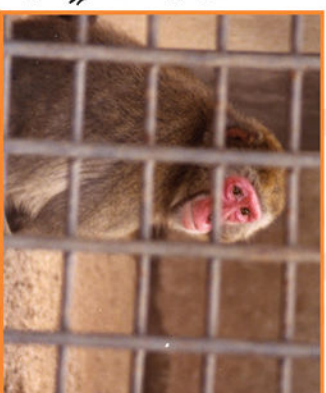


保護というでまかせ

動物園には、絶滅の危機にある種の動物はほとんどいない上、檻の中での繁殖計画が野生動物の数を維持するのに貢献しているとはいえません。人工的に檻の中で繁殖させた動物を野生の環境に放つても、生存するのは難しく、大変な費用もかかる為、実際に絶滅危惧動物を守るという試みを行っている動物園はほとんどありません。

動物園が動物を繁殖させる理由はただ一つ、赤ちゃん動物は客寄せになることです。その結果、頭数が増えて“余剰”になった年若い動物たちは、移動動物園、サーカスや珍動物の商売人へと払い下げられます。また、それらの余剰動物はときに姿を変え、貴重な“在庫”となります。例えば、クワ牧場の近くでは、クワの皮や油、クワ肉の缶詰など、様々なクワ製品を売る店が点在しています。

繁殖すぎた霊長類は、定期的に動物実教用として施設に売られています。過去の例として、新潟県の白山公園の猿が37匹、実験施設に売り渡されたことが分かっています。



搾取であって、教育ではない

世界動物園水族館協会および世界動物保護協会による調査で、日本のクワ牧場の極度にひどい環境が明らかになりました。多くの牧場では、一つの狭い檻に最大で30頭のクワが押し込まれ、ストレスのたまったクワは攻撃的になり、争いあっていました。多くのクワが足を引きずり、体には多数の大きな傷がありました。昭和新山にあるクワ牧場では、若いクワが自らの糞尿の上に横たわっていました。獣医師が常駐していたのはたった一つのクワ牧場だけでした。

報告書の作成に携わったヴァンター・ワトキンスは、「クワ牧場では、動物に対する否定的な印象を与え、観光客に、クワの生態や行動に対する間違った認識を引き起こしている」と報告しています。

ケニアのアンプセリ象研究プロジェクトのキー・ス・リンゼイは、動物園は、教育という観点では、ほとんど何も提供するものがないと考えています。彼は、「自然の中で生きる象の映像を見るほうが、何も無い檻の中で立ちすくんでいる惨めな象を目の前で見ると良い」と言います。「たとえその動物園が、どれほど自然を“再現”した作りになっていたとしても」